

茨城県教育財団文化財調査報告第378集

# 坊内遺跡 貝塚古墳群

一般県道矢幡潮来線道路改良  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25年3月

茨城県潮来土木事務所  
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第378集

坊<sup>ほう</sup>内<sup>うち</sup>遺跡  
貝塚<sup>かいづか</sup>古墳群

一般県道矢幡潮来線道路改良  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 25 年 3 月

茨城県潮来土木事務所  
公益財団法人茨城県教育財団

## 序

茨城県では、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、一般国道や主要地方道などの広域的な交通ネットワークの整備を推進しています。

その一環として茨城県潮来土木事務所は、潮来市築地地区において、一般県道矢幡潮来線道路改良事業を計画しました。しかしながら、その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である坊内遺跡と貝塚古墳群が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県潮来土木事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成23年4月から5月までの2か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、坊内遺跡及び貝塚古墳群の調査の成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、委託者であります茨城県潮来土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、潮来市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成25年 3月




公益財団法人茨城県教育財団  
理事長 鈴木 欣一

## 例 言

- 1 本書は、茨城県潮来土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団（現 公益財団法人茨城県教育財団）が平成 23 年度に発掘調査を実施した茨城県潮来市築地字坊内 153 番地 4 ほかにある坊内遺跡及び、茨城県潮来市築地字ムクリ山 402 番地 2 ほかにある貝塚古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。  
調査 平成 23 年 4 月 1 日～5 月 31 日  
整理 平成 25 年 1 月 1 日～3 月 31 日
- 3 発掘調査は、調査課長櫻村宣行のもと、以下の者が担当した。  
首席調査員兼班長 皆川 修  
首席調査員 寺内久永  
主任調査員 兼子博史
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、首席調査員寺内久永が担当した。
- 5 貝塚古墳群の文字資料については、国立歴史民俗博物館館長の平川南氏に御指導頂いた。
- 6 茨城県潮来市の坊内遺跡と貝塚 A 貝塚については、潮来市教育委員会から資料を送付して頂いた。

## 凡 例

- 1 遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、両遺跡を包含できるように、 $X = -2680$  m、 $Y = +64760$  mの交点を基準点 (A 1a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。  
調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4 m四方の小調査区を設定した。  
大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3、…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」のように呼称した。
- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。  
遺構 SD - 溝跡 SI - 竪穴住居跡 SK - 土坑 PG - ビット群  
遺物 DP - 土製品 Q - 石器 TP - 拓本記録土器
- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。
  - (1) 遺構全体図は坊内遺跡が250分の1、貝塚古墳群が120分の1、各遺構の実測図については原則として60分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
  - (2) 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。
  - (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・施釉		炉・火床面		炭化材
●	土器	○	土製品	- - -	硬化面
- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。
- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。
  - (1) 現存値は（ ）を、推定値は [ ] を付して示した。計測値の単位はm、cm、gで示した。
  - (2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。
  - (3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。
- 6 遺構の「主軸」は、最長の軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
坊内遺跡・貝塚古墳群の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 坊内遺跡	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 縄文時代の遺構と遺物	10
(1) 堅穴住居跡	10
(2) 土坑	11
2 その他の遺構と遺物	18
(1) 土坑	18
(2) ビット群	21
(3) 遺構外出土遺物	22
第4節 まとめ	25
第4章 貝塚古墳群	29
第1節 調査の概要	29
第2節 基本層序	29
第3節 遺構と遺物	30
1 中世以降の遺構と遺物	30
溝跡	30
2 その他の遺構と遺物	32
(1) 埋没谷	32
(2) 遺構外出土遺物	33
第4節 まとめ	35
写真図版	PL 1～PL 6
抄 録	

## ぼううち かいづか 坊内遺跡・貝塚古墳群の概要

### 遺跡の位置と調査の目的

坊内遺跡と貝塚古墳群は、県の南東部に位置する潮来市の中央部に所在しています。両遺跡は、北浦と常陸利根川に面した南北に延びる行方台地上の標高約32mの平坦地に立地しています。一般県道矢幡潮来線道路改良事業に伴い、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、茨城県教育財団が平成23年度に、坊内遺跡は207㎡、貝塚古墳群は74㎡について発掘調査を行いました。



調査区域は、行方台地の南部に位置し、遺跡の西側には深い谷が入り込み、水田地帯に面して急な斜面となっています。台地中央部は平坦で、東側は谷に向かってなだらかに傾斜しています。坊内遺跡と貝塚古墳群は、約240m離れており、谷を一つ挟んで南北に位置しています。



坊内遺跡・貝塚古墳群遠景（南から）

## 坊内遺跡の調査の内容と結果

調査の結果、竪穴住居跡、土坑、ピット群などが確認できました。主な出土遺物は、縄文土器、須恵器、石器などです。竪穴住居跡は、炉や柱穴が確認でき、土器の様相から縄文時代中期に位置付けられます。土坑も、縄文時代中期にみられる形状で、集落に伴う貯蔵穴群と考えられます。調査区域外には縄文土器が散布しており、台地上に集落が広がっていたと推測できます。



調査区域全景



縄文土器片集合

## 貝塚古墳群の調査の内容と結果

調査の結果、溝跡と埋没谷が確認できました。主な出土遺物は、縄文土器、陶器、磁器、土製品などです。溝跡は、旧道に伴う側溝と捉えられ、陶磁器の出土状況から中世から近世にかけて埋没したと考えられます。埋没谷は、行方台地によくみられる砂層上面に関東ロームに由来する土砂が再堆積した状況で、東側の谷に向かって埋没していったようです。



調査区域全景



埋没谷調査状況



# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

平成20年8月7日、茨城県潮来土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道欠幡潮来線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成21年4月7日に坊内遺跡・貝塚古墳群の現地踏査を、平成22年6月8日に坊内遺跡、平成22年10月20日、12月3日に貝塚古墳群の試掘調査をそれぞれ実施し、両遺跡の所在を確認した。平成22年8月26日に坊内遺跡、12月6日に貝塚古墳群について、茨城県教育委員会教育長は茨城県潮来土木事務所長あてに、事業地内に遺跡が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成22年11月2日、茨城県潮来土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成22年12月10日、茨城県潮来土木事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成23年2月21日、茨城県潮来土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道欠幡潮来線道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成23年2月22日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県潮来土木事務所長あてに、坊内遺跡と貝塚古墳群における発掘調査の範囲及び面積等について回答し、あわせて調査機関として、財団法人茨城県教育財団（平成24年4月から公益財団法人茨城県教育財団）を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県潮来土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、坊内遺跡、貝塚古墳群の発掘調査を平成23年4月1日から5月31日まで実施した。

## 第2節 調査経過

坊内遺跡と貝塚古墳群の調査は、平成23年4月1日から5月31日までの2か月間にわたって、両遺跡を並行して実施した。以下、その概要を表で記載する。

期間 工程	4月		5月	
調査準備 表土除去 遺構確認	■	■		
遺構調査	■	■	■	■
遺物洗浄 注記 写真整理	■	■	■	■
補足調査 撤収				■

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

坊内遺跡は、茨城県潮来市築地字坊内153番地4ほかに、貝塚古墳群は、茨城県潮来市築地字ムクリ山402番地2ほかに所在している。

潮来市は県の南東部に位置し、東部は北浦に面し、西部は常陸利根川に面している。市域の地形は、行方台地の南東部にあたる洪積台地と、北浦や常陸利根川沿岸の沖積低地に大別され、北部が台地、南部が低地となっている。洪積台地の標高は北西部で約39m、南東部で約31mと北西から南東に傾斜した地形である。また、この台地は、各河川に開析された樹枝状の谷が奥深くに入り込み、複雑な地形を形成している。

台地の地質は、古東京湾に堆積した成田層を基盤とし、シルト質の下層部と砂質の上層部からなっている。その上には凝灰質の常総粘土層、関東ローム層が順に堆積し表土に至っている。低地は、利根川や支流の働きによって運ばれた土砂や台地から流失した腐食植物、砂礫、砂泥、砂等が堆積して形成されている。

両遺跡は、市域の中央部に位置し、北東約3kmのところに位置する北浦と、外浪逆浦に流入する常陸利根川に挟まれた標高約32mの台地上に位置している。遺跡の立地する台地の西側には深い谷が入り込み、急な斜面を経て常陸利根川に続く低地に面している。台地の中央部は平坦で、北に向かって広がっており、東側はなだらかに傾斜している。調査前の現況は畑地や荒地である。

### 第2節 歴史的環境

潮来市には、縄文時代から近世まで大小145以上の遺跡が確認されており<sup>1)</sup>、その多くは北浦沿岸と、霞ヶ浦沿岸から常陸利根川沿岸の洪積台地縁辺部に分布している。ここでは、当遺跡と周辺遺跡の概要について記述する。

縄文時代の遺跡として、狭間貝塚<sup>2)</sup> (62)、埴貝塚<sup>3)</sup>、江寺遺跡 (7)、若横遺跡 (9) などがある。坊内遺跡から南へ約15kmに位置する狭間貝塚は、縄文時代に形成された貝塚で、ハマグリ、マガキ、マテガイ等を含む貝層が確認され、他に魚骨やイノシシ、シカの骨等が出土している。出土した土器は野島式土器、鶴ヶ島台式土器、茅山下層式土器が主であり、縄文時代早期の貝塚に比定されている。この時期は、縄文海進が最も進行した時期とされ、貝塚A貝塚 (5)、貝塚B貝塚 (6)、横山貝塚 (27)、妙光寺裏遺跡松葉貝塚 (16)、妙光寺裏遺跡後野貝塚 (17)、中郷貝塚 (39)、塔之上貝塚 (63) などが内陸の台地上で確認されており、北浦や霞ヶ浦に注ぐ各河川の奥深くまで海水が流入していたことを物語っている。貝塚A貝塚では、縄文時代中期の住居跡13軒が確認されている<sup>4)</sup>。埴貝塚は、当遺跡から北に約3kmの北浦に面した舌状台地に位置し、調査区域が貝塚本体ではないため、古墳時代以降の集落跡が主な報告内容となっているが<sup>5)</sup>、調査区域から出土した縄文土器は阿玉台式土器や加曾利E式土器などの中期を中心としており、野島式や鶴ヶ島台式、浮島式等の早期や前期の土器もみられることから、縄文時代の集落が近くに存在し、その時期の貝塚が形成されていたことが想定できる。また、横山貝塚は地点貝塚で、獣骨や貝製腕輪などが検出されたという記録が残っている<sup>6)</sup>。

弥生時代の遺跡は、貝塚A貝塚、田ノ森遺跡 (26)、堀内遺跡 (29) などがあげられ、北浦や常陸利根川に

面する台地上に弥生土器の散布が見られる<sup>7)</sup>。埴貝塚からは、住居跡1軒が確認されている。この住居跡は、古墳時代の住居と重複し、壁と床の一部が残存するだけだが、出土土器から後期中葉の時期に比定されている。

古墳時代になると中央の支配が地方へも及ぶことになる。台地上に築造された古墳で、常陸利根川を南に臨む台地上に所在する稲荷山古墳群(68)を始めとして、大生西部古墳群(20)、大生東部古墳群(21)、棒山古墳群等数々の古墳群が確認できる。大生西部古墳群の1号墳は、昭和27年に調査が行われ、6世紀後半の時期に比定されている<sup>8)</sup>。また、棒山古墳群の1号墳(庚申塚古墳)も発掘調査による記録が残されている<sup>9)</sup>。当時代の集落跡としては、埴貝塚、大賀立野遺跡、古高覚宗遺跡(36)、梶内遺跡、大生西遺跡などが挙げられる。埴貝塚では、中期の住居跡が3軒、後期の住居跡が5軒ほど確認されている。大賀立野遺跡では、後期の住居跡が38軒確認されている。また、古高覚宗遺跡、梶内遺跡、大生西遺跡からは後期の土器が採集され、北浦に面した台地上にそれぞれの集落が形成されていたと考えられる<sup>10)</sup>。

律令期には、当地域は行方郡大生郷に属しており、行方郡衙は現在の行方市行方(旧麻生町行方)に置かれていたと推定されている<sup>11)</sup>。坊内遺跡に隣接する熱田神社には、大和武尊が祀られており、806年(大同元年)に社殿がつくられたと伝えられている。近隣の当時代の遺跡としては、貝塚A貝塚、古高覚宗遺跡、梶内遺跡、田ノ森遺跡等があげられる。田ノ森遺跡では、平安時代の住居跡が2軒確認されている<sup>12)</sup>。

行方郡は、1139年(保延5)に鹿島社に寄進されて鹿島社領となる。そして当地域は、常陸平氏とその一族である大塚氏の支配下に置かれるようになり<sup>13)</sup>、地頭職の島崎氏、行方氏(後の小高氏)、麻生氏、玉造氏の各氏が拠点を持つようになる。島崎氏は、島崎氏の居城で土塁や堀跡、井戸や馬出しの跡などが現存しており、当時の栄華をうかがうことができる。その後、当地域にも佐竹氏の支配の手が伸びるが、長くは続かず、徳川氏の所領となる。江戸時代には、地方と江戸を結ぶ水運の要所となり、水郷潮来の名を今に伝えている。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1中の該当遺跡番号と同じである。

#### 註

- 1) 潮来市教育委員会『潮来市遺跡地図』潮来市 2003年3月
- 2) 茂木雅博 袁靖 吉野健一「常陸扶間貝塚」『茨城大学人文学部 考古学研究報告』茨城大学人文学部文化財情報学教室 1995年10月
- 3) 高村勇「一般県道矢橋潮来線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 埴貝塚」『茨城県教育財団文化財調査報告』第42集 1987年3月
- 4) 汀安衛編「貝塚A貝塚遺跡発掘調査報告書」『潮来町埋蔵文化財調査報告書』貝塚A貝塚遺跡調査会 1999年6月
- 5) 註3に同じ
- 6) 潮来町郷土史研究会編『ふるさと潮来』第5号 1980年11月
- 7) 註1に同じ
- 8) 大場啓雄「常陸大生古墳群」潮来町教育委員会 1971年5月
- 9) 海老原幸福「棒山古墳群発掘調査報告書」潮来町教育委員会 1981年3月
- 10) 潮来町史編さん委員会『潮来町史』潮来町 1996年3月
- 11) 註10に同じ
- 12) 山武考古学研究所編「田ノ森遺跡」潮来市遺跡調査会 2001年6月
- 13) 茨城地方史研究会編『茨城の歴史 県南・鹿行編』茨城新聞社 2002年12月

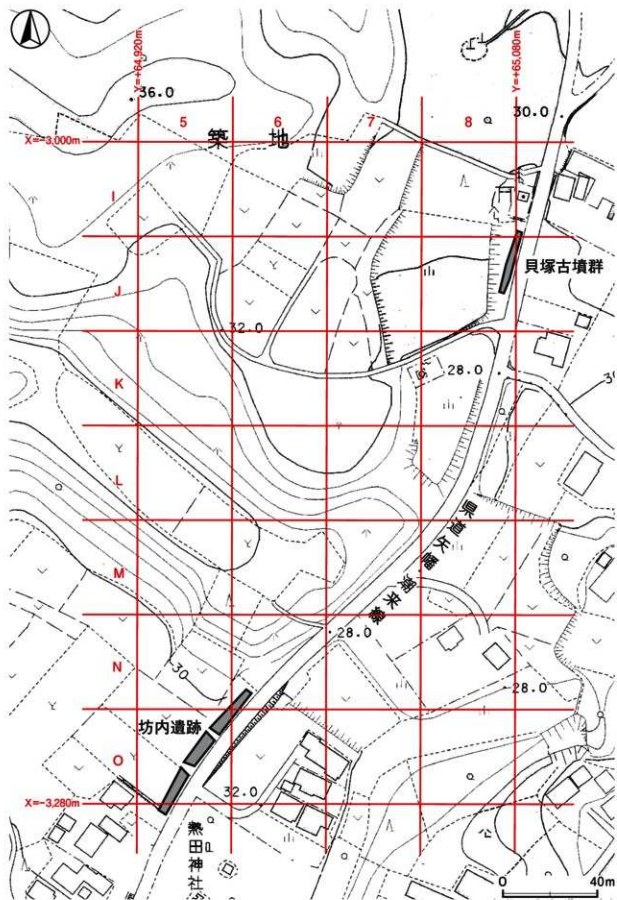
#### 参考文献

茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』茨城県 2001年3月



表1 坊内遺跡・貝塚古墳群遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世
①	坊内遺跡		○					40	永代寺遺跡			○	○			
②	貝塚古墳群				○		○	41	湯谷遺跡			○	○	○		
3	ムクリ山遺跡	○						42	湯谷遺跡貝塚				○			
4	向野菱山遺跡	○		○	○			43	大平館跡						○	
5	貝塚A貝塚	○	○			○		44	荒井遺跡	○						
6	貝塚B貝塚	○						45	平池貝塚	○						
7	江寺遺跡	○		○	○			46	アバタイ遺跡					○		
8	原古墳群				○			47	小泉古墳					○		
9	若槻遺跡	○						48	曲松遺跡				○		○	
10	前中遺跡					○		49	稲井川遺跡	○		○	○			
11	今林遺跡				○			50	天王原古墳				○			
12	大生原源立遺跡			○	○	○		51	天王原遺跡				○	○		
13	境塚古墳群				○			52	中辻遺跡				○	○		
14	大生原遺跡				○			53	中辻古墳				○	○		
15	妙光寺裏遺跡	○		○				54	後明古墳				○			
16	妙光寺裏遺跡松葉貝塚	○						55	瀬来台下遺跡					○		
17	妙光寺裏遺跡後野貝塚	○						56	天王台遺跡						○	
18	前倉遺跡				○	○		57	南作遺跡					○		
19	大平遺跡					○	○	58	こんにゃく塚古墳				○			
20	大生西部古墳群				○			59	新立古墳				○			
21	大生東部古墳群				○			60	立金古墳群				○			
22	釜谷古墳群				○			61	扇台遺跡	○		○	○			
23	台山遺跡	○		○				62	狭間貝塚	○						
24	西ノ内遺跡	○		○	○			63	塔之上貝塚	○		○				
25	田ノ森古墳群				○			64	能房遺跡	○			○			
26	田ノ森遺跡			○	○	○		65	御殿山貝塚	○				○		
27	横山貝塚	○		○	○			66	原堂遺跡	○						
28	仲台古墳群				○			67	瀬来障屋跡							○
29	梶内遺跡			○	○	○		68	稲荷山古墳群				○			
30	浜ノ原遺跡	○		○				69	大塚野1丁目遺跡				○	○		
31	水原古墳群				○			70	大塚野古墳				○			
32	浜ノ原遺跡西畑貝塚	○						71	浅間塚古墳				○			
33	林遺跡	○						72	大塚野2丁目遺跡				○	○		
34	原内遺跡	○		○				73	前野遺跡	○					○	
35	台ノ窪イノ山遺跡	○		○				74	観音寺古墳群				○			
36	古高覚宗遺跡	○	○	○	○	○		75	地頭内遺跡	○						
37	栗坪イノ山遺跡					○	○	76	尾ノ詰遺跡					○	○	
38	平遺跡					○		77	内野遺跡					○		
39	中郷貝塚	○														



第2図 坊内遺跡・貝塚古墳群調査区設定図（潮来市都市計画図 2500 分の 1 から作成）

## 第3章 坊内遺跡

### 第1節 調査の概要

坊内遺跡は、茨城県潮来市築地字坊内153番地4ほかに所在し、常陸利根川の左岸標高32mの台地上に位置している。この台地は、東側に北浦を望む舌状台地で、樹枝状の谷が不規則に入り込み複雑な地形を形成している。遺跡の範囲は、東西に約270m、南北に約170mで台地の平坦部に広がっている。調査区域は、遺跡の西部に位置し、北西側が沖積低地に面する北東から南西にかけての細長い範囲である。調査面積は207㎡で、調査前の現況は畑地である。

調査の結果、竪穴住居跡1軒（縄文時代）、土坑21基（縄文時代・時期不明）、ピット群1か所（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物コンテナ（60×40×20cm）に2箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、須恵器（坏・甕・甍）、石器（磨石）、土製品（土器片錘）などである。

### 第2節 基本層序

調査区南部（O5b9）にテストピットを設定し、基本土層（第3図）の観察を行った。以下、観察結果から層序を説明する。

第1層は黒褐色を呈する耕作土層である。層厚は24～30cmである。

第2層は褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は17～39cmである。

第3層は明褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は7～34cmである。

第4層は暗褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は17～33cmである。

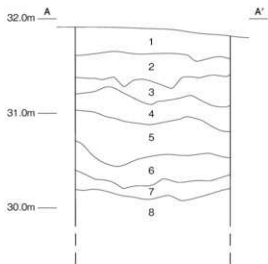
第5層は褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともにもっとも強く、層厚は28～51cmである。

第6層は明褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は18～31cmである。

第7層は褐色を呈するハードローム層で、粘土粒子を微量含んでいる。粘性・締まりともに強く、層厚は7～20cmである。

第8層はにぶい褐色を呈するハードローム層で、粘土粒子を少量含んでおり、常総粘土層への漸移層である。粘性・締まりともに強く、層厚は30cm以上で、さらに下層は未掘のため本来の層厚は不明である。

遺構は、第2層の上面で確認した。



第3図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑11基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

##### (1) 竪穴住居跡

##### 第1号住居跡（第4・5図）

**位置** 調査区南部のO5i4区、標高32mの平坦な台地上に位置している。

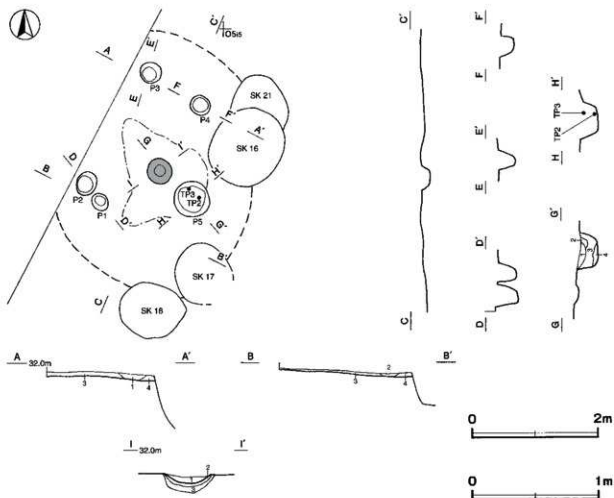
**確認状況** 遺構確認面で、炉の痕跡と硬化面の一部を確認した。

**重複関係** 第16～18・21号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 北西部が調査区域外に延びていること、わずかに覆土が残存している状況であったので、明確な規模は不明であるが、炉と柱穴の配置から軸長4mほどと推測できる。

**床** はほぼ平坦で、炉のまわりに硬化面が確認できた。

**炉** 径39cmの円形で、床面を19cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は赤変硬化しており、使用頻度の高さがうかがわれる。第2・3層は、炉床面の構築土である。



第4図 第1号住居跡実測図



## 炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量  
 2 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量、ローム粒子微量  
 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量

ピット 5か所。P1～P4は不規則な配列ながら、主柱穴と考えられる。P5は径57cmの円形で、覆土に焼土やわずかな灰が含まれていた。炉と近接していることや硬化面の広がりから類推すると貯蔵穴の可能性も考えられるが、詳細は不明である。

## P5土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量  
 2 褐色 ローム粒子中量  
 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量  
 4 暗褐色 炭化粒子中量、焼土粒子少量、ロームブロック微量

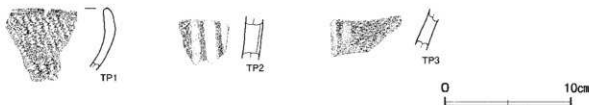
覆土 4層に分層できる。層厚が薄く、全体の様相は不明瞭であるが、不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

## 土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量  
 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量  
 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量  
 4 褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 縄文土器片7点（深鉢）が出土している。TP2はP5の覆土下層から、TP3はP5の覆土上層から出土している。その他、混入した土製品1点（不明）も出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から中期後葉（加曾利EⅡ～EⅣ時期）と考えられる。



第5図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第5図）

番号	種別	容積	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	長石・石英	にがい褐色	2段LR, 単筋縄文を施文	覆土中	PL.3
TP2	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	2条の隆帯を形成 LR縄文を施文	P5覆土下層	PL.3
TP3	縄文土器	深鉢	長石・石英・細理	暗褐色	1条の隆帯が残存 LR縄文を縦位回転で施文	P5覆土上層	PL.3

## (2) 土坑

## 第2号土坑（第6図）

位置 調査区中央部のO5e7区、標高32mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.58m、短径0.47mの楕円形で、長径方向はN-57°-Eである。深さは86cmで、底面は平坦である。壁は、直立している。

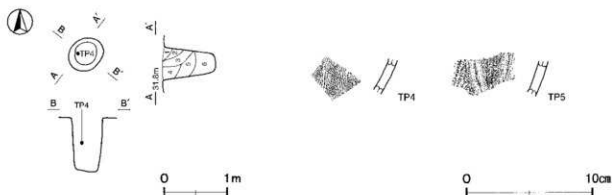
覆土 6層に分層できる。ローム粒子が混じる不規則な堆積状況で、埋め戻されている。

## 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量  
 2 褐色 ローム粒子中量  
 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量  
 4 暗褐色 ロームブロック少量  
 5 暗褐色 ローム粒子微量  
 6 褐色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 縄文土器片3点(深鉢)が出土している。TP4は、西部の覆土中層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から縄文時代中期後葉(加曾利EⅢ~EⅣ式期)と考えられる。



第6図 第2号土坑・出土遺物実測図

第2号土坑出土遺物観察表(第6図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP4	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・磁質	黒褐	条縄文を縦位に施す	覆土中層	
TP5	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤緑・磁質	明赤褐	LR縄文を施した後縦位帯と磨り消しを施す	覆土中	PL3

#### 第4号土坑(第7図)

**位置** 調査区北部のN5j0区、標高31mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 北西部が調査区域外に延びているため、北東・南西方向の径が0.80mで、北西・南東方向の径は0.49mしか確認できなかった。楕円形と推定でき、長径方向はN-43°-Eである。深さは70cmで、底面は平坦である。壁は、直立している。

**覆土** 4層に分層できる。ロームブロックが不規則に混じる堆積状態で、埋め戻されている。

##### 土層解説

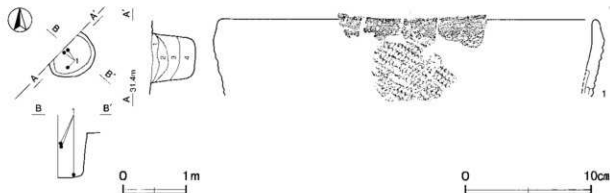
1 暗褐色 ローム粒子少量

3 褐色 ロームブロック中量

2 極暗褐色 ローム粒子少量

4 暗褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 縄文土器片7点(深鉢)が出土している。1は、覆土下層と上層から出土した破片が接合したものである。



第7図 第4号土坑・出土遺物実測図

所見 時期は、出土土器から縄文時代中期後葉（加曾利EⅢ～EⅣ式期）と考えられる。

#### 第4号土坑出土遺物観察表（第7図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[296]	(6.1)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部無文帯 横方向の磨き 2段L字部跡 文を施文	覆土下層・土層	5% PL.3

#### 第5号土坑（第8図）

位置 調査区北部のO5a0区、標高31mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北西部が調査区域外に延びているため、北東・南西方向の径が0.92mで、北西・南東方向の径は0.56mしか確認できなかったが、円形または楕円形と推定できる。深さは36cmで、底面は平坦である。壁は、外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックが多量に混じる不規則な堆積状況で、埋め戻されている。

##### 土層解説

- 1 褐 色 ローム粒子多量 3 褐 色 ロームブロック多量  
2 褐 色 ロームブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片12点（深鉢）が出土している。TP6は、覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代中期後葉（加曾利EⅢ～EⅣ式期）と考えられる。



第8図 第5号土坑・出土遺物実測図

#### 第5号土坑出土遺物観察表（第8図）

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP6	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	縄文施文後周縁帯と磨り消しを施す	覆土中層	PL.3
TP7	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	隆帯に竹管による刺突文 以下無文	覆土中	PL.3

#### 第6号土坑（第9図）

位置 調査区北部のO5a0区、標高31mの台地平坦部に位置している。

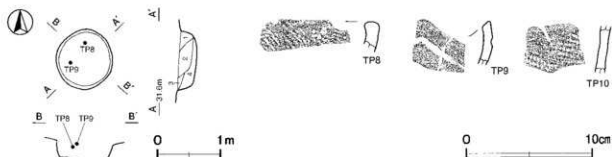
規模と形状 径0.95mの円形である。深さは25cmで、底面は平坦である。壁は、直立している。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックが混じる不規則な堆積状況で、埋め戻されている。

##### 土層解説

- 1 褐 褐 色 ローム粒子中量 3 褐 色 ロームブロック多量  
2 褐 色 ロームブロック中量 4 褐 色 ローム粒子中量

**遺物出土状況** 縄文土器片 17 点（深鉢）が出土している。TP 8・TP 9 は、覆土上層から出土している。  
**所見** 時期は、出土土器から縄文時代中期後葉（加曾利 E Ⅲ～E Ⅳ式期）と考えられる。



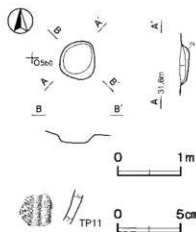
第9図 第6号土坑・出土遺物実測図

第6号土坑出土遺物観察表（第9図）

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 8	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	RL 無筋縄文を施文	覆土上層	PL 3
TP 9	縄文土器	深鉢	長石・石英・黒色粒子・細礫	褐色	口唇部無文 太い沈線を山形に描出	覆土上層	PL 3
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐色	RL 単筋縄文を施文	覆土中	

### 第7号土坑（第10図）

**位置** 調査区北部の O 5 b 区、標高 31 m の台地平坦部に位置している。



**規模と形状** 径 0.62 m の円形である。深さは 12cm で、底面は平坦である。壁は、外傾して立ち上がっている。

**覆土** 2層に分層できる。ロームブロックが不規則に混じる堆積状態で、埋め戻されている。

#### 土層解説

- 1 棕褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子多量

**遺物出土状況** 縄文土器片 4 点（深鉢）が出土している。TP11 は、覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から縄文時代中期後葉（加曾利 E Ⅲ式期）と考えられる。

第10図 第7号土坑・出土遺物実測図

第7号土坑出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	にぶい褐色	除帯1条残存 RL 縄文を施文後磨り消しを施す	覆土中	PL 3

### 第15号土坑（第11図）

**位置** 調査区南部の O 5 h 5 区、標高 32 m の台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径 1.08 m、短径 0.97 m の楕円形で、長径方向は N - 58° - W である。深さは 95cm で、底面

は平坦である。壁は、内傾して立ち上がっている。

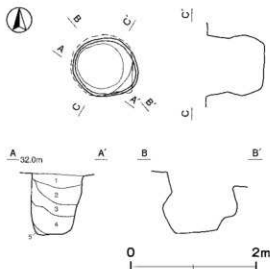
**覆土** 5層に分層できる。ローム粒子が混じる不規則な堆積状態で、埋め戻されている。

**土層解説**

- |   |   |    |           |
|---|---|----|-----------|
| 1 | 褐 | 色  | ロームブロック中量 |
| 2 | 褐 | 色  | ローム粒子少量   |
| 3 | 褐 | 色  | ロームブロック少量 |
| 4 | 褐 | 色  | ローム粒子中量   |
| 5 | 暗 | 褐色 | ローム粒子少量   |

**遺物出土状況** 縄文土器片1点(深鉢)が出土しているが、細片のため図示できなかった。

**所見** 時期は、出土土器から縄文時代中期後葉と考えられる。



第11図 第15号土坑実測図

**第16号土坑 (第12図)**

**位置** 調査区南部のO5i5区、標高32mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第1号住居跡と第21号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径1.27m、短径1.11mの楕円形で、長径方向はN-25°-Eである。深さは86cmで、底面は平坦である。壁は底面付近が内傾し、上位は外傾して立ち上がっている。

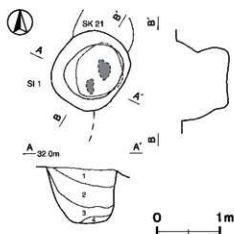
**覆土** 4層に分層できる。ローム粒子が混じる不規則な堆積状態で、埋め戻されている。

**土層解説**

- |   |   |   |                  |
|---|---|---|------------------|
| 1 | 褐 | 色 | ロームブロック少量        |
| 2 | 褐 | 色 | ローム粒子・焼土粒子少量     |
| 3 | 褐 | 色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 4 | 褐 | 色 | ローム粒子多量、焼土粒子微量   |

**遺物出土状況** 縄文土器片2点(深鉢)が出土しているが、細片のため図示できなかった。

**所見** 時期は、出土土器から縄文時代中期後葉と考えられる。炭化物の堆積は、底面だけに確認できたもので、貯蔵穴として使用した段階で流入したと考えられることから、第1号住居跡の炭化物が流れ込んだ可能性も考えられる。



第12図 第16号土坑実測図

**第17号土坑 (第13図)**

**位置** 調査区南部のO5i4区、標高32mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第1号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 南東部が攪乱を受けているが、径1.00mの円形と推定できる。深さは44cmで、底面は平坦である。壁は、外傾して立ち上がっている。

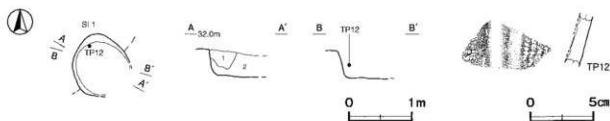
**覆土** 2層に分層できる。ロームブロックが混じる不規則な堆積状態で、埋め戻されている。

**土層解説**

- |   |   |   |           |   |   |   |         |
|---|---|---|-----------|---|---|---|---------|
| 1 | 褐 | 色 | ロームブロック微量 | 2 | 褐 | 色 | ローム粒子少量 |
|---|---|---|-----------|---|---|---|---------|

**遺物出土状況** 縄文土器片7点（深鉢）が出土している。TP12は、北部の覆土中層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から縄文時代中期後葉（加曾利EⅢ式期）と考えられる。



第13図 第17号土坑・出土遺物実測図

第17号土坑出土遺物観察表（第13図）

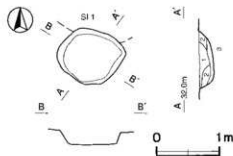
番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	にぶい褐	縄文施文後2条の隆帯を形成	覆土中層	PL 3

### 第18号土坑（第14図）

**位置** 調査区南部のO54区、標高32mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第1号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径1.10m、短径0.88mの不整楕円形で、長径方向はN-87°-Wである。深さは22cmで、底面は平坦である。壁は、外傾して立ち上がっている。



第14図 第18号土坑実測図

**覆土** 3層に分層できる。ローム粒子が混じる不規則な堆積状態で、埋め戻されている。

#### 土層解説

- 1 褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

**遺物出土状況** 縄文土器片1点（深鉢）が出土しているが、細片のため図示できなかった。

**所見** 時期は、出土土器から縄文時代中期後葉と考えられる。

### 第19号土坑（第15図）

**位置** 調査区南部のO55区、標高32mの台地平坦部に位置している。

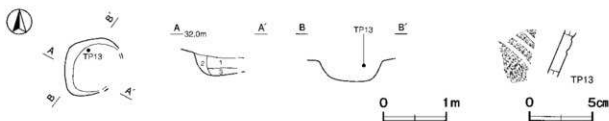
**規模と形状** 南東部が攪乱を受けており、北東・南西方向の径は1.08mで、北西・南東方向の径は0.75mしか確認できなかった。不整楕円形と推定でき、長径方向はN-33°-Eである。深さは30cmで、底面は平坦である。壁は、外傾して立ち上がっている。

**覆土** 3層に分層できる。ロームブロックが混じる不規則な堆積状態で、埋め戻されている。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 縄文土器片2点(深鉢)が出土している。TP13は、北部の覆土上層から出土している。  
**所見** 時期は、出土土器から縄文時代中期後葉(加曾利E式期)と考えられる。



第15図 第19号土坑・出土遺物実測図

第19号土坑出土遺物観察表(第15図)

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	灰褐色	LR 半筋縄文を施文 3本の沈線を施す	覆土上層	PL 3

### 第21号土坑(第16図)

**位置** 調査区南部のO5i5区、標高32mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第1号住居跡を掘り込み、第16号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 南部が掘り込まれているため、北西・南東方向の径が0.93m、北東・南西方向の径は0.70mしか確認できなかったが、不整形と推定できる。深さは82cmで、底面は平坦である。壁は、底面付近がやや内傾し、上位は外傾して立ち上がっている。

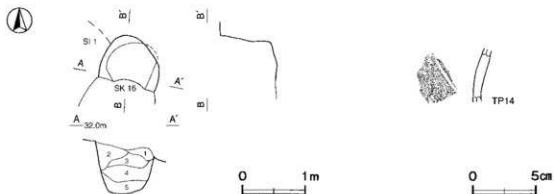
**覆土** 5層に分層できる。ロームブロックが混じる不規則な堆積状態で、埋め戻されている。

#### 土層解説

- |       |           |        |                |
|-------|-----------|--------|----------------|
| 1 褐色  | ローム粒子多量   | 4 褐色   | ロームブロック多量      |
| 2 褐色  | ロームブロック中量 | 5 極暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量   |        |                |

**遺物出土状況** 縄文土器片1点(深鉢)が出土している。TP14は、覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から縄文時代中期後葉(加曾利E式期)と考えられる。



第16図 第21号土坑・出土遺物実測図

第21号土坑出土遺物観察表（第16図）

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP14	縄文土器	漆鉢	長石・石英・赤色粒子	灰黒	沈澱1本残存	覆土中	PL.3

表2 縄文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
2	O5e7	N-57°-E	楕円形	0.58×0.47	86	平坦	直立	人為	縄文土器	
4	N5j0	N-43°-E	[楕円形]	0.80×(0.49)	70	平坦	直立	人為	縄文土器	
5	O5a0	-	[円形・楕円形]	0.92×(0.56)	36	平坦	外傾	人為	縄文土器	
6	O5a0	-	円形	0.95×0.89	25	平坦	直立	人為	縄文土器	
7	O5h0	-	円形	0.62×0.60	12	平坦	外傾	人為	縄文土器	
15	O5h5	N-58°-W	楕円形	1.08×0.97	95	平坦	内傾・外傾	人為	縄文土器	
16	O5i5	N-25°-E	楕円形	1.27×1.11	86	平坦	内傾・外傾	人為	縄文土器	SI 1→SK21→ 本跡
17	O5i4	-	[円形]	[1.00]×0.95	44	平坦	外傾	人為	縄文土器	SI 1→本跡
18	O5j4	N-87°-W	不整形円形	1.10×0.88	22	平坦	外傾	人為	縄文土器	SI 1→本跡
19	O5i5	N-33°-E	[不整形円形]	1.08×(0.75)	30	平坦	外傾	人為	縄文土器	
21	O5i5	-	[不整形円形]	0.93×(0.70)	82	平坦	内傾・外傾	人為	縄文土器	SI 1→本跡→ SK16

2 その他の遺構と遺物

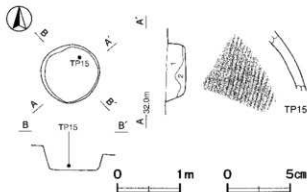
今回の調査で、時期や性格が特定できない土坑10基、ピット群1か所を確認した。このうち土坑2基は文章と実測図、土坑8基は実測図と一覧表、ピット群は実測図とピット計測表をそれぞれ掲載する。

(1) 土坑

第1号土坑（第17図）

位置 調査区中央部のO5d8区、標高32mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径0.95mの円形である。深さは32cmで、底面は平坦である。壁は、外傾して立ち上がっている。



第17図 第1号土坑・出土遺物実測図

覆土 2層に分層できる。ロームブロックが混じる不規則な堆積状態で、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 須恵器片1点(欠)が出土している。その他流れ込んだ縄文土器片4点も出土している。TP15は、覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から奈良時代以降と考えられるが、性格は不明である。

第1号土坑出土遺物観察表（第17図）

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP15	須恵器	甕	長石・黒色粒子	灰白	外面縦位の平行叩き直 自然軸	覆土下層	PL.4



## 第10号土坑 (第18図)

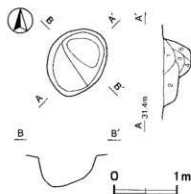
**位置** 調査区北部のO5a0区、標高31mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径1.13m、短径0.90mの楕円形で、長径方向はN-21°-Eである。深さは45cmで、底面には段差があり、北東部が一段低くなっている。壁は、外傾して立ち上がっている。

**覆土** 5層に分層できる。ロームブロックが混じる不規則な堆積状態で、埋め戻されている。

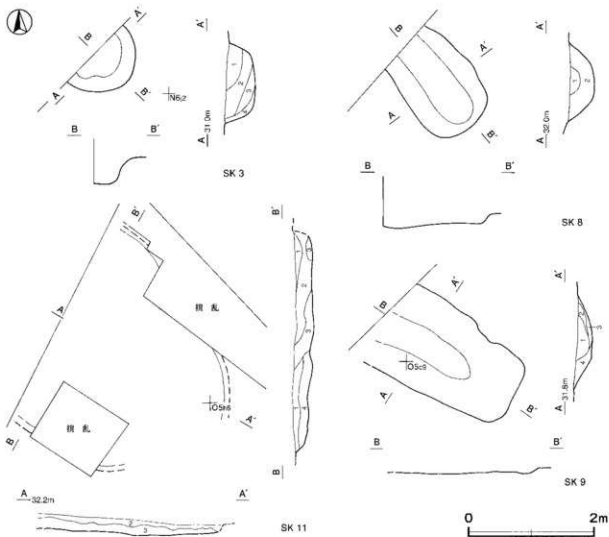
## 土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 褐色 ロームブロック中量

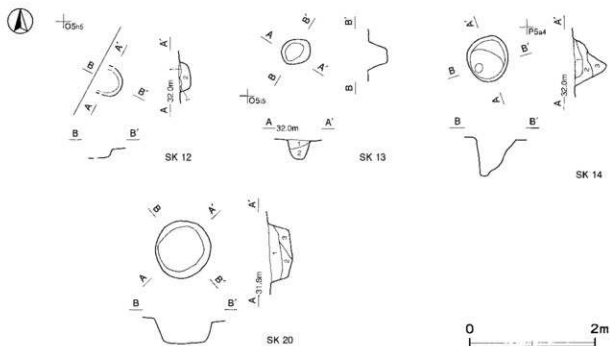


第18図 第10号土坑実測図

**所見** 詳細な時期は不明であるが、縄文時代の土坑群に近接していることと、規模や形状が類似していることから、縄文時代の可能性がある。



第19図 その他の土坑実測図(1)



第20図 その他の土坑実測図(2)

第3号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック多量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ローム粒子多量

第8号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第9号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック中量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量

第11号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ローム粒子中量

第12号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第13号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック少量

第14号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

第20号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

表3 その他の土坑一覧表

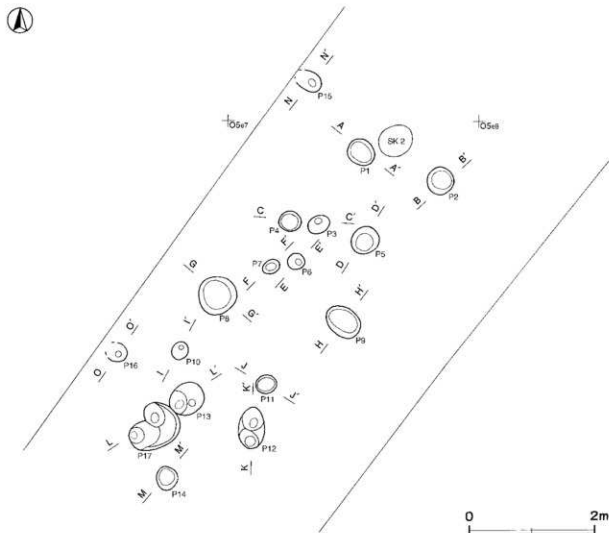
番号	位置	長径方向	平面形	縦 横		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	O548	-	円形	0.95 × 0.94	32	平坦	外傾	人為	須恵器	
3	N 611	-	[円形・楕円形]	1.25 × 0.66	42	平坦	外傾	人為		
8	O549	N-41'-W	[楕円形]	(1.65) × 1.20	38	平坦	縦斜	人為		
9	O549	N-54'-W	[楕円形]	(2.23) × 1.50	22	皿状	縦斜	人為		
10	O540	N-21'-E	楕円形	1.13 × 0.90	45	有段	外傾	人為		
11	O545	-	-	(3.52) × 2.90	26	平坦	外傾	人為		

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
12	O5h5	-	円形・楕円形	0.48 × 0.25	18	平坦	外積	自然		
13	O5h5	N-42°-E	楕円形	0.46 × 0.41	32	平坦	外積	自然		
14	P5a3	-	円形	0.72 × 0.67	62	有段	縦積・直立	人為		
20	O5d8	-	円形	0.92 × 0.88	40	平坦	外積	人為		

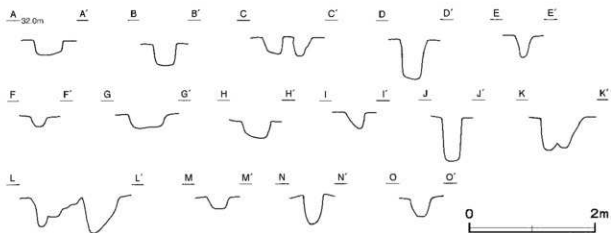
## (2) ビット群

## 第1号ビット群 (第21・22図)

調査区東部のO5d7～O5f6区の標高32mの台地平坦部において、北東・南西方向が約7m、北西・南東方向が約3mの範囲から柱穴状のビット17か所を確認した。平面形は長径26～82cmの円形または楕円形で、深さは16～70cmである。時期は、不明である。



第21図 第1号ビット群実測図(1)



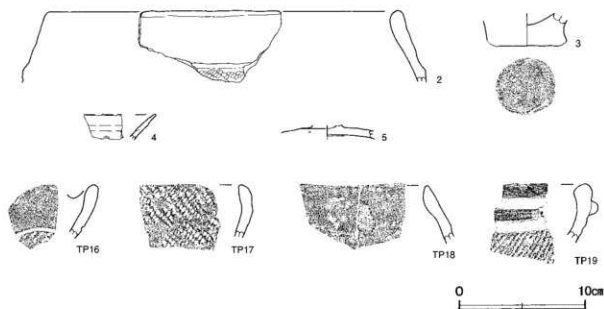
第22図 第1号ピット群実測図(2)

ピット計測表

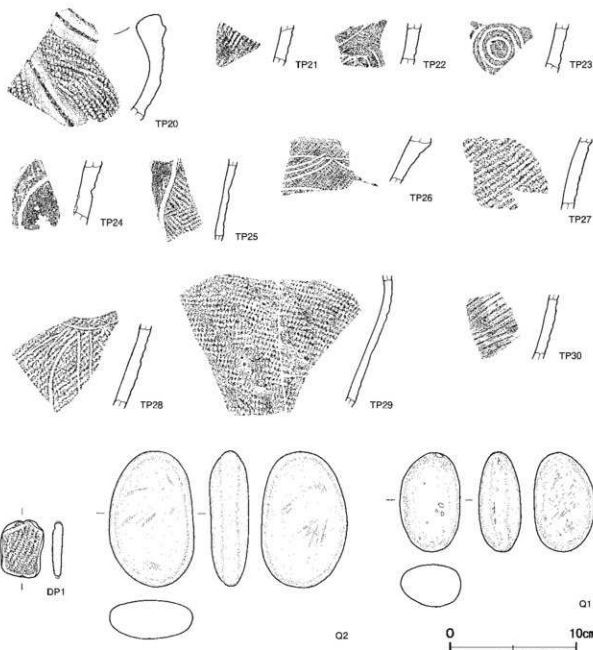
ピット 番号	規模 (cm)			ピット 番号	規模 (cm)			ピット 番号	規模 (cm)		
	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ		長径	短径	深さ
1	42	39	23	7	26	21	16	13	60	58	58
2	41	40	36	8	60	58	22	14	38	34	18
3	33	26	30	9	58	45	28	15	(38)	32	48
4	32	32	28	10	28	27	28	16	30	(18)	30
5	44	44	63	11	34	26	70	17	82	66	47
6	26	24	35	12	65	41	35				

(3) 遺構外出土遺物 (23・24図)

遺構に伴わない主な遺物について実測図及び観察表を掲載する。



第23図 遺構外出土遺物実測図(1)



第24図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第23・24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
2	縄文土器	深鉢	[27.8]	(5.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい焼	普通	口縁部無文帯 横方向の磨き 2段RL 単筋縄文を施文	SK1	5% PL.3
3	縄文土器	深鉢	-	(2.7)	[6.2]	長石・石英	黒曜	普通	外・内面ナデ	SK1	5% PL.4
4	須恵器	坏	-	(2.0)	-	長石・石英	灰	良好	外・内面クロナデ	表土	5%
5	須恵器	蓋	-	(1.2)	-	長石・石英	灰	良好	瓦井部回転ヘラ削り	表土	30%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒曜	口縁部無文 LR 縄文を施文 無文帯と文様帯を洗線で区画	表土	
TP17	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい焼	2段RL 単筋縄文を施文	表土	PL.3

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴はか	出土位置	備考
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 硝子	橙	口縁部無文 直下に1本の微段帯を形成	表土	PL 3
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 硝子	にぶい黄褐色	口唇部無文 直下に段帯を巡らす LR単節縄文を施文	表土	PL 3
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 硝子	明褐色	2段RL単節縄文を施文 段帯の形成と磨り消しを施す	表土	PL 4
TP21	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	LR単節縄文を施文	表土	
TP22	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	縄文を施文後沈線による円弧・直線を描出	SK8	
TP23	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	3重の同心円を沈線で描出	表土	PL 4
TP24	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	赤褐色	縄文施文後磨り消しを施す 無文帯と支線帯を沈線で区画	SK8	
TP25	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	2段LR単節縄文を沿状に施文 磨り消しによる無文帯と支線帯を沈線で区画	SK1	PL 4
TP26	縄文土器	深鉢	長石・石英・硝子	明赤褐色	2段LR単節縄文を施文 沈線による波状文を描出	表土	PL 4
TP27	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 硝子	にぶい褐色	2段LR単節縄文を施文	SK8	
TP28	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐色	2段LR単節縄文を施文 2本単位の平行沈線を施す	表土	PL 4
TP29	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	黒褐色	2段RL単節縄文を縦位回転で施文	SK1	PL 4
TP30	須恵器	甕	長石・石英・黒色粒子	灰	外面斜位の平行押き痕	表土	PL 4

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP1	土器片鉢	4.6	3.4	0.8	16.8	長石・石英	深鉢製部片利用 周縁部研磨	表土	PL 4

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	磨石	7.9	4.7	3.3	178.9	安山岩	表・裏面磨り痕	表土	PL 4
Q 2	磨石	10.8	6.7	3.1	347.2	安山岩	表・裏面磨り痕	表土	PL 4

## 第4節 ま と め

### 1 はじめに

今回の調査報告では、堅穴住居跡1軒、土坑21基、ピット群1か所等を確認し、当遺跡が縄文時代の集落跡の一部であったことが明らかになった。ここでは、縄文時代における当遺跡と周辺遺跡の様相についてふれるとともに、若干の考察を加え、まとめとしたい。

### 2 縄文時代の潮来の様子

潮来市において人々の営みを確認できるのは、縄文時代の早期になってからである<sup>31</sup>。狭間貝塚<sup>23</sup>は、当遺跡から南へ約15kmの距離に位置している。貝層からはハマグリやマガキ、マテガイ等の貝殻とともに、野島式土器、網ヶ島台式土器、茅山下層式土器が出土しており、早期に形成された貝塚と捉えられている。貝殻や土器とともに、クロダイやマダイ、スズキ等の魚類の骨も出土しており、海洋性の魚介類が食料とされていたことが分かる。また、シカやイノシシ等の骨も出土しており、陸生の動物も食料とされていたようである。

貝塚A貝塚は、当遺跡から南東へ約500m、貝塚B貝塚は南東へ約300mと近い距離にあり、当遺跡と同じ行方台地上に所在している。貝塚A貝塚からは、縄文時代、弥生時代、古墳時代の集落跡の一部が確認され、縄文時代中期の阿玉台式期から加曾利式期の住居跡や袋状土坑を含む59基の土坑が報告されている<sup>32</sup>。塚貝塚<sup>41</sup>と同様、台地上の集落跡の調査によって、貝塚を形成した人々の遺構や遺物が記録されている。

当遺跡と近隣の遺跡の調査報告によって、樹枝状に開析された谷津に面した台地上に集落が存在していたことが推定できる。縄文海進は、縄文時代前期に最も進んだといわれており<sup>53</sup>、当遺跡の所在する台地が、霞ヶ浦と北浦の二つの湖、利根川や常陸利根川、前川といった河川に面していることを含め、縄文時代の集落や貝塚の存在が縄文海進の痕跡を今に伝えている。

### 3 集落の様子

ここでは、確認できた堅穴住居跡や土坑について振り返り、遺構全体を捉えていきたい。

#### (1) 出土遺物と各遺構の時期

出土遺物は、主に加曾利E式土器である<sup>61</sup>。第1号住居跡の出土土器TP1は、2段RL単節縄文が施文されており、口唇部は無文となっている。TP2・TP3はいずれも隆帯と太い沈線が垂下する文様構成となっている。土器の一部分であるので、その他の特徴的な文様を確認することができないので、詳細を述べることはできないが、加曾利EⅡ式期からⅢ式期の時期と考えられる。

第4号土坑の出土土器(1)は、2段RL単節縄文が施文され、口縁部は無文帯となっている。第7号土坑の出土土器(TP11)は、隆帯が垂下して文様帯と縦の磨り消し帯を区画している。磨り消し文は、加曾利EⅡ式期から見られるようになる。第2号土坑の出土土器(TP5)、第5号土坑の出土土器(TP6)は、弧状に施された弱い隆帯によって、文様帯と無文帯が区画されている。加曾利EⅢ式期の段階では磨り消し文の構成が多様化したり、幅広になったりしていることから、これらの土器は、加曾利EⅡ式期からEⅢ式期の時期と考えられる。また、土器片の中には隆帯の構成から加曾利EⅣ式期の特徴を持つものもみられる。

これらの土器にみられる文様は、中期以外の各時期にもあることや土器の一部分からの判断であるので限定はできないが、総じて中期後葉（加曾利EⅡ～EⅣ式期）に各遺構が存在していたと考えられる。

## (2) 竪穴住居跡と集落の広がり

当遺跡で確認できた住居跡は、1軒である。第1号住居跡は、遺構確認面で床面が露出していたため、壁の高さや住居の平面形は不明確であるが、が跡とそれを取り囲む硬化面や不規則な配列の柱穴が確認できた。貝塚A貝塚において調査報告がなされている住居跡にも、加曾利EⅡ式期に位置づけられるものがあり、台地上の近接した位置に同時期の集落が存在していた可能性が高い。

この時期の集落は、住居が環状に配置されることが、これまでの研究で分かっている。谷口康浩氏は、「環状集落と縄文社会構造」<sup>7)</sup>の中で、集落の重帯構造を提唱し、下総タイプとして千葉県域の住居群と小竪穴（土坑）が二重の環状構造を呈していることを指摘し、これらの集落構造が茨城県域や栃木県域でも同じようにみられると述べている。当遺跡にも、第1号住居跡と同時期の住居が存在していたと考えられ、集落を形成していたと推測できる。既に調査報告<sup>8)</sup>されている今回の調査区域に隣接する部分では、住居跡は発見されていないが、縄文時代の土坑の存在や調査区域内から縄文土器が出土していることから、集落の広がりが想定される。

前期に最も進んだ縄文海進は、中期になると海岸線が後退してくる。調査区域は霞ヶ浦と北浦を眼下に見下ろす台地上に所在しており、海岸線が後退してきた時期においても海水面は遺跡からそう遠くない位置にあったと考えられる。貝塚A貝塚<sup>9)</sup>や埴貝塚<sup>10)</sup>で確認された集落の様相と狭間貝塚<sup>11)</sup>の存在は、遺跡と海水面が近い距離にあったことを物語っており、当遺跡における同時期の集落が海水域と関わっていたことを示唆している。

## (3) 土坑の時期と配置

土坑は、確認できた位置から2群に分けられる。第4～7号土坑は、中期後葉の時期で調査区域の北部にまとまって形成されている。第15～19・21号土坑は、南部にまとまって形成されており、第16～18・21号土坑は、第1号住居跡と重複している。これらの土坑も中期後葉に比定され、断面形状から貯蔵穴の可能性が考えられる。加曾利E式期の貯蔵穴の形状は、中期中葉の阿玉台式期に特徴的な袋状土坑が継承され、時間の経過とともに内傾の度合いが小さくなっていくという変遷をたどる<sup>12)</sup>。貝塚A貝塚でも、阿玉台式期の土坑や加曾利E式期の土坑が確認されており、形態的な特徴や変化を読み取ることができる。当遺跡の第15・16・21号土坑は、断面形状がやや内傾している。これらの土坑は、出土遺物が細片のため明確な時期を比定することはできないが、袋状の形態が円筒状に変化する過程の土坑と捉えられ、加曾利EⅡ式期以降の時期に及ぶと考えられる。

調査区域の中央部はピット群1か所と時期不明の土坑があり、前述の2つの土坑群は独立して存在しているようにみえる。鈴木保彦氏は、「集落の変遷と地域性」<sup>13)</sup>の中で、集落と土坑の関係を取り上げ、住居群が環状に配置されたやや内側に土坑が環状に巡っていると述べ、加曾利EⅠ～Ⅱ式期に属する事例について紹介している。これらは関東地方では共通する現象と言及されており、当遺跡もこの例に準じるとすれば、調査区域外に住居跡群と土坑群が環状に広がっている可能性がある。



## 4 おわりに

今回の報告は調査区域が狭小なため、遺跡の全容を捉えるところまでは至らなかったが、この時期の住居跡と土坑群の配置の一端を確認することができた。そして、行方台地と霞ヶ浦や北浦の地理的環境から、いわゆる古霞ヶ浦と遺跡の関わりについて考え、近隣の遺跡の様相や千葉県事例もひもとき、少ない遺構や遺物を取り上げながら遺跡の様相に迫ることに努めた。推測の域を脱しない部分は多々あるが、今回の調査報告が地域の歴史の解明の一資料となるとともに、古霞ヶ浦沿岸地域の縄文時代研究の一助となれば幸いである。

## 註

- 1) 潮来町史編さん委員会『潮来町史』潮来町 1996年3月
- 2) 茂木雅博 袁靖 吉野健一「常陸扶間貝塚」『茨城大学人文学部 考古学研究報告』茨城大学人文学部文化財情報学教室 1995年10月
- 3) 汀安衛編「貝塚A貝塚遺跡発掘調査報告書」『潮来町埋蔵文化財調査報告書』貝塚A貝塚遺跡調査会 1999年6月
- 4) 高村勇「一般県道矢幡潮来線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 塚貝塚」『茨城県教育財団文化財調査報告』第42集 1987年3月
- 5) 加藤晋平 小林達雄 藤本強編「縄文人とその環境1」『縄文文化の研究』雄山閣 1994年7月
- 6) 大川清 鈴木公雄 工楽善通編『日本土器辞典』雄山閣 1996年12月
- 7) 谷口康浩『環状集落と縄文社会構造』学生社 2005年3月
- 8) 株式会社ノガミ 潮来市教育委員会編『坊内遺跡-携帯電話無線基地局設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』潮来市教育委員会 2011年3月
- 9) 註3に同じ
- 10) 註4に同じ
- 11) 註2に同じ
- 12) 横堀孝徳「前田村遺跡の円筒状土坑について」『研究ノート』6号 財団法人茨城県教育財団 1997年6月
- 13) 鈴木克彦 鈴木保彦編「集落の変遷と地域性」『縄文集落の多様性1』雄山閣 2009年10月

## 参考文献

- 潮来市教育委員会『潮来市遺跡地図』潮来市 2003年3月  
 茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』茨城県 2001年3月  
 石井寛「縄文時代後期の住居址内土坑」『縄文時代』22号 縄文時代文化研究会 2011年5月



## 第4章 貝塚古墳群

### 第1節 調査の概要

貝塚古墳群は、茨城県潮来市築地字ムクリ山402番地2ほかに所在し、常陸利根川の左岸標高約30mの台地上に位置している。この台地は、東側に北浦を望む舌状台地で、樹枝状の谷が不規則に入り込み複雑な地形を形成している。遺跡の範囲は、東西に約250m、南北に約470mで台地の平坦部に広がっている。調査区はこの台地の西部に位置し、西側は斜面地で沖積低地に面している。調査面積は74㎡で、調査前の現況は荒地である。

調査の結果、溝跡2条（中世以降）、埋没谷1か所（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物コンテナ（60×40×20cm）に1箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、陶器（天目茶碗・碗類・鉢類）、磁器（碗）、土製品（土器片・管状土製品）、石器（剥片）などである。

### 第2節 基本層序

調査区中央部（J8c0）にテストピットを設定し、基本土層（第26図）の観察を行った。以下、観察結果から層序を説明する。

第1層は黒褐色を呈する耕作土層である。層厚は34～37cmである。

第2層は褐色を呈する砂層で、微量のシルトを含んでいる。粘性は普通で、締まりは強い。層厚は24～42cmである。

第3層は黄褐色を呈する砂層で、微量のシルトを含んでいる。粘性は弱く、締まりは強い。層厚は12～29cmである。

第4層は黄褐色を呈する砂層である。粘性は弱く、締まりは強い。層厚は4～10cmである。

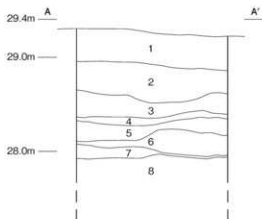
第5層はオリーブ褐色を呈する砂層である。粘性は弱く、締まりは強い。層厚は7～21cmである。

第6層はにぶい黄褐色を呈する砂層で、下層には5～8mmの鉄分を含む層がみられる。粘性は弱く、締まりは強い。層厚は3～27cmである。

第7層はオリーブ褐色を呈する砂層で、少量のシルトを含んでいる。粘性は弱く、締まりは強い。層厚は3～16cmである。

第8層は黒褐色を呈する礫層で、細礫とともに鉄分を含んだ砂粒が堆積している。層厚は21cm以上で、さらに下層は未掘のため本来の層厚は不明である。

遺構は、第2層上面で確認できた。



第26図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 中世以降の遺構と遺物

当該時代の遺構は、溝跡2条を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

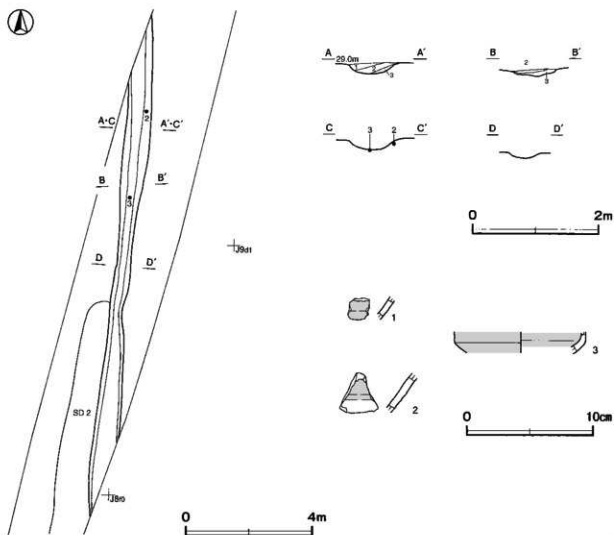
溝跡

##### 第1号溝跡（第27図）

**位置** 調査区中央部から南部のJ 8b0～J 8f9区、標高29mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第2号溝跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** J 8b0区から南方向（N-174°-W）に直線状に延びており、南部と北部が調査区域外まで及んでいるため、確認できた長さは15.48mである。規模は上幅0.35～0.84m、下幅0.17～0.50m、深さ7～16cmである。断面形はU字状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。底面の標高は、北部が高く、南部に行くに従ってわずかに低くなっている。



第27図 第1号溝跡・出土遺物実測図

**覆土** 3層に分層できる。周囲から土砂が流れ込んだ堆積状況で自然堆積である。

**土層解説**

- 1 褐色 ローム粒子少量  
2 暗褐色 ローム粒子少量  
3 褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 陶器片4点(天目茶碗2, 碗類1, 不明1)が出土している。その他流れ込んだ土師器片1点も出土している。2は北部の壁面, 3は中央部の底面, 1は中央部の覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 調査区域の西側を南北に走る現道にほぼ並行していることから, 旧道の側溝と考えられる。出土土器から中世以降には機能していたと推定され, 江戸時代に埋没したと考えられる。

第1号溝跡出土遺物観察表(第27図)

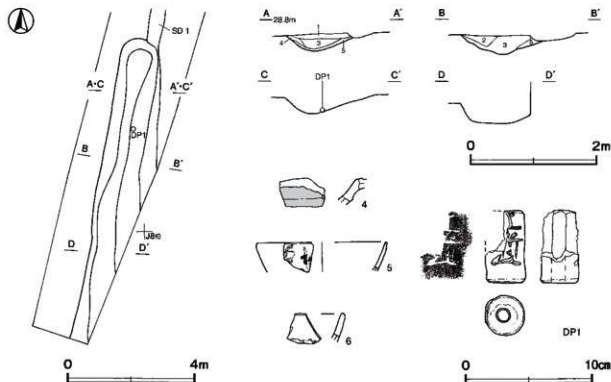
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	焼成	絵付・輪索	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
1	陶器	天目茶碗	-	(1.8)	-	にぶい黄褐色・黒褐色	良好	鉄輪	輪は漬け掛け	瀬戸・美濃系	覆土中	5% PL 6
2	陶器	天目茶碗	-	(3.2)	-	淡黄・暗褐色	良好	鉄輪	輪は漬け掛け	瀬戸・美濃系	壁面	5% PL 6
3	陶器	碗類	-	(1.7)	-	灰黄・灰白・暗赤褐色	良好	灰輪・鉄輪	輪は掛分け	瀬戸・美濃系	底面	5% PL 6

第2号溝跡(第28図)

**位置** 調査区南部のJ 8d9-J 8f9区, 標高29mの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第1号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** J 8d9区から南方向(N-169°-W)に直線状に延びており, 南端が調査区域外まで及んでいるため, 確認できた長さは9.88mである。規模は上幅1.28~1.50m, 下幅0.30~0.80m, 深さ28~33cmである。断面形はU字状で, 壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。底面の標高は, 北部が高く, 南部に行くに従ってわずかに低くなっている。



第28図 第2号溝跡・出土遺物実測図

**覆土** 5層に分層できる。周囲から土砂が流れ込んだ堆積状態で自然堆積である。

**土層解説**

- |       |                 |       |                        |
|-------|-----------------|-------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子微量         | 4 暗褐色 | 砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化粒子・砂粒微量       | 5 暗褐色 | 砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子微量       |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子・砂粒微量 |       |                        |

**遺物出土状況** 陶器片2点(碗類・鉢類)、磁器片5点(碗類)、土製品1点(管状土製品)、瓦片1点が出土している。その他流れ込んだ縄文土器片4点、土師器片4点、須恵器片1点、土製品1点が出土している。4～6は覆土中から、DP1は中央部の底面から出土している。

**所見** 調査区域の西側を南北に走る現道にほぼ並行していることから、旧道の側溝と考えられる。出土土器から中世以降には機能していたと推定され、江戸時代に埋没したと考えられる。

第2号溝跡出土遺物観察表(第28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	焼成	絵付・輪索	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
4	陶器	鉢類	-	(21)	-	淡黄・にぶい赤褐	良好	鏽軸	外・内面輪索	瀬戸・美濃系	覆土中	5% PL.6
5	磁器	碗	[102]	(24)	-	灰白・灰白	良好	絵付・透明軸	外面草花文	肥前系	覆土中	5% PL.6
6	磁器	碗	-	(23)	-	灰白・明オリブ灰	良好	絵付・透明軸	外面草花文	肥前系	覆土中	5% PL.6

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP1	数珠土製品	5.8	3.2	1.1	(434)	長石・石英・雲母	外面へつ書き文字「口道」カ	底面	PL.6

表4 中世以降の溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)					
1	J80～J89	N-17°-W	直線	(15.48)	0.35-0.81	0.17-0.50	7-16	U字状	磁鈔	自然	陶器	SD2→本跡
2	J89～J89	N-16°-W	直線	(9.88)	1.28-1.50	0.30-0.80	28-33	U字状	磁鈔	自然	陶器、磁器、土製品	本跡→SD1

2 その他の遺構と遺物

今回の調査で、埋没谷1か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 埋没谷

第1号埋没谷(第29図)

**位置** 調査区北部のI 8j0～J 9b1区、標高30mほどの台地平坦部に位置しており、東側に向かって傾斜する谷の一部である。

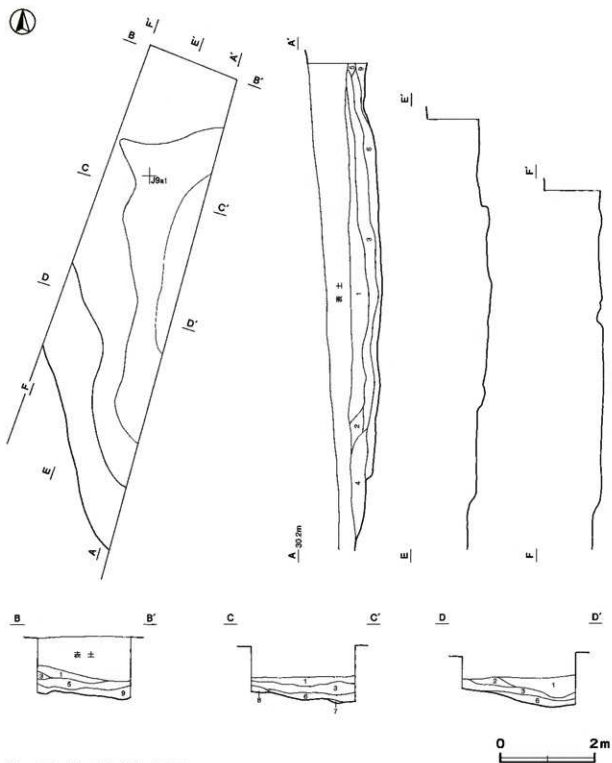
**規模と形状** 南北方向に9.5m、東西方向に2.0mの堆積層で、西から東へ傾斜しており、調査区内における最深部は62cmであった。

**覆土** 9層に分層できる。4層から9層にかけては各層ごとの砂粒の含有状況がほぼ均一で、周囲から流入した土砂が堆積している。

**土層解説**

- |         |              |          |                     |
|---------|--------------|----------|---------------------|
| 1 黒褐色   | ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 にぶい黄褐色 | 砂粒少量                |
| 2 灰褐色   | ローム粒子・焼土粒子微量 | 7 黄褐色    | 砂粒多量、ローム粒子微量(締まり弱い) |
| 3 暗褐色   | ローム粒子・焼土粒子微量 | 8 にぶい黄褐色 | 砂粒中量(締まり弱い)         |
| 4 暗褐色   | ローム粒子・砂粒微量   | 9 黄褐色    | 砂粒多量(締まり弱い)         |
| 5 オリブ褐色 | 砂粒中量、ローム粒子微量 |          |                     |

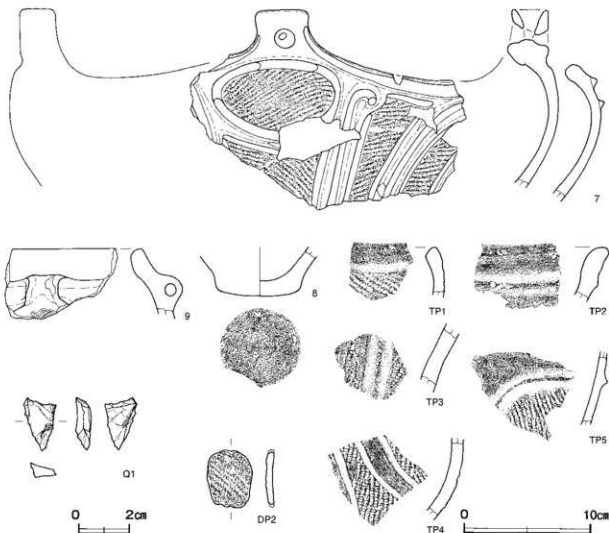
所見 堆積土中から出土した遺物はないが、上面から加曾利E式期の土器が出土している。埋没谷付近の表土は32～94cmで、縄文時代以降の土器が出土していないことから、埋没の過程で流れ込んだ可能性が高い。



第29図 第1号埋没谷実測図

(2) 遺構外出土遺物(第30図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第30図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第30図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	他成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
7	縄文土器	深鉢	(420)	(160)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	良好	口唇厚帯手状の突出部に交差した穿孔。2本の隆帯を主として曲線を描出。2段RL単筋縄文を施文	表土	5% PL.6
8	縄文土器	深鉢	-	(39)	63	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい橙	普通	外・内面ナデ	表土	5% PL.6
9	縄文土器	深鉢	-	(56)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい橙	普通	口縁部無文 穿孔のある突起部形成 以下縦位回転の2段RL単筋縄文を施文	表土	5% PL.6

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP.1	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	橙	口唇部無文 2段RL単筋縄文を施文	表土	PL.6
TP.2	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	橙	口縁部無文 横位の隆帯を形成	表土	PL.6
TP.3	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい橙	2段単筋縄文を縦位に施文	表土	PL.6
TP.4	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	2段単筋縄文を縦位に施文 無文帯と文様帯を沈線で区画	表土	PL.6
TP.5	縄文土器	深鉢	長石・石英	明黄緑	無文帯と文様帯を隆帯帯で区画 RL縄文を施文	表土	PL.6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP.2	土器片断	4.6	3.6	0.7	14.3	長石・石英・雲母・細礫	深鉢底部片利用 周縁部研磨	表土	PL.6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q.1	割片	21	13	0.6	1.24	黒曜石	上下方向からの調整痕	表土	PL.6



## 第4節 ま と め

### 1 はじめに

今回の調査で、溝跡2条、埋没谷1か所を確認し、中世以降に活用された道路に伴う溝跡の様子と縄文時代に埋没した谷の一部を明らかにすることができた。ここでは、縄文時代や中世以降の当遺跡と周辺遺跡の様相についてふれるとともに、若干の考察を加え、まとめたい。

### 2 縄文時代と中世以降の遺跡周辺の様相

縄文時代の当地域の様相については、坊内遺跡の第4節に記述したとおりで、当遺跡から谷を挟んで南へ約240mの距離に坊内遺跡が所在し、貝塚A貝塚、貝塚B貝塚は、当遺跡から南東へそれぞれ約700m、約500mの距離である。当遺跡の南西側にはムクリ山遺跡が隣接しており、当遺跡の範囲内には向野登山遺跡が所在し、それぞれ縄文時代の遺跡として周知されている。当遺跡周辺の台地上には、数多くの縄文時代の集落が形成されていたことが想定でき、調査区域からも縄文土器が出土したと考えられる。

大生古墳群<sup>1)</sup>は当遺跡から北へ1.5kmの距離に位置しており、東部古墳群と西部古墳群を合わせて約90基の古墳が確認されている。当遺跡の範囲内にも大小さまざまな古墳が点在し、その中には中世以降に形成された塚も存在している。調査区域に近接した北側にも塚があり、道祖神が祀られている。塚については、古墳の可能性も視野に入れ調査を行ったが、古墳の周溝は確認できなかった。道祖神の参道を正面にして調査区域の西側には現道が通っており、その景観から古来の街道が現在まで使われ続けたと考えられる。

### 3 溝跡と道

道祖神は、村の出入口などの路傍に祀られている神で、塞の神とも呼ばれ、古事記や日本書紀の記載の中に起源を見出すことができる<sup>2)</sup>。調査区域はこの社の南側に位置しており、現道が調査区域と社の西側を南北に走っている。調査区域の南側約200mには、大和武尊が祀られた熱田神社があり、これらの社の付近には古くから街道が通っていたことが推測できる。

溝跡は2条とも、調査区域の西側を走る現道と平行して確認できたことから、旧道に沿う側溝の可能性が高い。道は、古来から往來の増加とともに、街道として機能していくことが多く、現在の道路の原型となっていることが少なくない。旧道が作られた時期は明確でないが、出土遺物から見ると、溝の機能は中世から江戸時代<sup>3)</sup>まで続き、自然に埋没していったようである。

### 4 おわりに

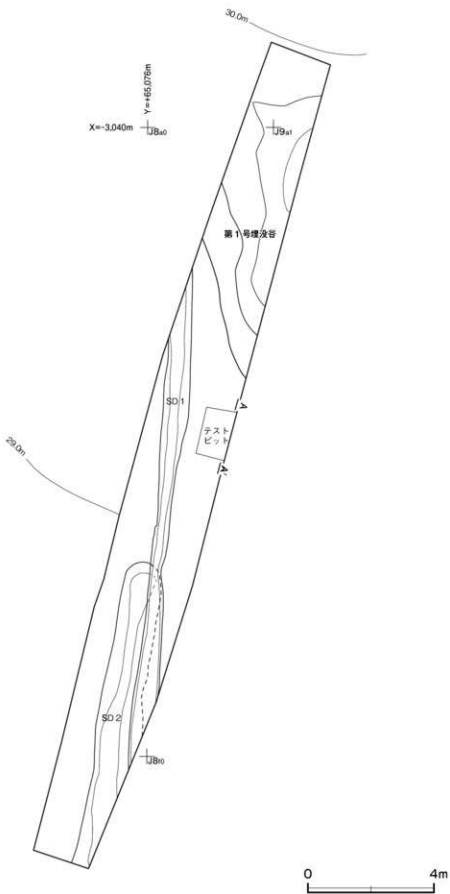
今回は調査区域が狭小なため、遺跡の全容を捉えるところまでは至らなかったが、調査区域を取り巻く環境から遺跡の様相についての若干の考察を加えた。推測の部分は多々あるが、坊内遺跡と合わせて、地域の歴史の解明の一資料となるとともに、潮来市域の考古学や歴史研究の一助となれば幸いである。

#### 註

1) 潮来町史編さん委員会『潮来町史』潮来町 1996年3月

2) 鎌田東二監修『日本の神々』東京芸術 2005年12月

3) 九州近世陶磁学会編『国内出土の肥前陶器－東日本の流通をさぐる－』2001年2月



第 31 図 貝塚古墳群遺構全体図

## 写 真 図 版



坊内遺跡調査区全景（北東から）

第1号住居跡  
遺物出土状況



第1号住居跡  
炉完掘状況



第1号住居跡  
完掘状況



PL2



第4・5・6・10号土坑 完掘状況



第15号土坑 完掘状況



第17・18号土坑 完掘状況



第16号土坑 完掘状況



第16・21号土坑 完掘状況



第1号土坑 完掘状況



第1号ピット群 完掘状況



坊内遺跡調査区全景 (南東から)



第1号住居跡，第2・4・5・6・7・17・19・21号土坑，遺構外出土土器



第 1 号土坑，遺構外出土土器・土製品・石器

貝塚古墳群  
調査区全景



第1・2号溝跡  
完掘状況



第1号埋没谷  
完掘状況





PL6



第1・2号溝跡，遺構外出土土器・土製品・石器

## 抄 録

ふりがな	ぼううちいせき かいづかこふんぐん							
書名	坊内遺跡 貝塚古墳群							
副書名	一般県道矢幡潮来線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第378集							
著者名	寺内久永							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2013(平成25)年3月15日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
坊内遺跡	茨城県潮来市築地 字坊内153番地4 ほか	08223 - 050	35度 58分 7秒	140度 33分 12秒	32m	20110401 ~ 20110531	207㎡	一般県道矢幡 潮来線道路改 良事業に伴う 事前調査
貝塚古墳群	茨城県潮来市築地 字ムクリ山402番 地2ほか	08223 - 013	35度 58分 13秒	140度 33分 12秒	30m	20110401 ~ 20110531	74㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
坊内遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	1軒	縄文土器(深鉢)			
	その他	時期不明	土坑	11基	須恵器(坏・蓋・甕)			
貝塚古墳群	その他	中・近世	土坑	10基	石器(磨石)			
			ピット群	1か所	土製品(土器片・管状土製品)			
貝塚古墳群	その他	中・近世	溝跡	2条	縄文土器(深鉢)			
					陶器(天目茶碗・碗類・鉢類)			
要約	坊内遺跡は、縄文時代の住居跡や貯蔵のために活用された土坑が確認された。住居や土坑を環状に配した集落の一部と推定できる。 貝塚古墳群の溝跡は道路に伴う側溝と捉えられる。							

仕 様

編 集	OS	Microsoft Windows 7 Home Premium Service Pack 1
	レイアウト	Adobe InDesign CS5
	図版作成	Adobe Illustrator CS4
	写真調整	Adobe Photoshop CS4
	Scanning	6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000ED
組 版	OpenType13級リユウミンPro・L基本	Adobe InDesign CS5
印 刷	オフセット印刷	
写真製版	スクリーン線数	モノクロ175線
	・印刷所へは、Adobe InDesign CS5でレイアウトしたものを入稿	

茨城県教育財団文化財調査報告第378集

坊 内 遺 跡  
貝 塚 古 墳 群

一般県道矢橋瀬来線道路改良  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成25（2013）年 3月12日 印刷

平成25（2013）年 3月15日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL. 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 (有)川田プリント

〒311-0041 水戸市上水戸4丁目6-53

TEL. 029-253-5551